



Asia-Europe Institute University of Malaya



International Workshop

New perspectives on Asian Epistemologies: Japan

**PANEL IV – EXPLORING JAPANESE NARRATIVES
23 SEPTEMBER, 2003**

Meiji Japan in Mori Ogai's "Maihime"
by

Dr. Bambang Wibawarta

Email: bambangwibawarta@yahoo.com

Asia-Europe Institute, University of Malaya
50603 Kuala Lumpur, Malaysia

Tel : 03-7967 4645 / 03-7967 6910 / 03-7967 6921 Fax: 03-7954 0799 E-mail: asia_euro@um.edu.my
<http://www.asia-europe-institute.org>

森鷗外と明治日本 ～『舞姫』における自我を中心に～

Dr. Bambang Wibawarta
バンバン ウィバワルタ

まえがき

森鷗外、本名森林太郎は、文久二年（1862年）一月十九日津和野に長男として生まれ、大正十一年（1922年）に亡くなった。十三歳の若さで東京医学学校に入学して、二十歳の時に卒業した。その後、陸軍軍医となり、そして文部省の留学生としてドイツで勉強して来た。鷗外がドイツに向かづて横浜港を出発したのは明治十七年七月（1884年）二十二歳の時で、帰国したのは明治二十一年九月（1888年）二十六歳の時だった。

四年間における鷗外のドイツ滞在中の時期と都市は次のようである。

- 一 ライプチヒ明治17年10月から明治18年10月まで
- 二 ドレスデン明治18年10月から明治19年3月まで
- 三 ミュンヘン明治19年3月から明治20年4月まで
- 四 ペルリン明治20年4月から明治21年7月まで

『舞姫』は『うたかたの記』と『文づかひ』とともにドイツ三部作とよく言われている。これらは作者森鷗外のドイツ留学の見聞に基づいて書れたものであることがよく知られている。鷗外は、この留学について「獨逸日記」に記している。

森鷗外全作の中では、「舞姫」（『国民之友』第六卷第六十九号、明治二十三・一）が最も論じられることの多い作品である。ドイツ三部作を論じる時も、論者の関心は特に「舞姫」に集中し、あるいは「うたかたの記」（『しがらみ章紙』第十一號、明治二十三・八）、「文づかひ」（『新著百種』）論として全

く別個に切り離された形で論究せられることが多いのである。

「舞姫」について、鷗外は「自作小説材料」¹の中に次のように書いている。

「うたかたの記」は獨逸南部の大都会ミュンヘンを重に書きました積りですが、「舞姫」の方は獨逸北部の大都会ベルリンの出采事を書いた意で、風俗とか土地とかいふものには、幾等か注意をして書いた積りです。日本から行つた貧乏な書生で、新聞社の通信員などして暮す人は随分ありますから。…其れから小芝居の舞妓といふものは、巴里の方でいふ「ドミモンド」即ち上等の私娼の類が多い。一体舞姫といふ字は、「バレチウヅ」の訳で、「バレット」といふ踊ををどる女のことです。（後略）

明治時代の激しい変化が作家達に大きな影響を与えた。その時代に生きて森鷗外も日本の近代化と密接な関係があることはいうまでもない。鷗外にはさまざまな役割があり、軍医・文学者・官僚人などである。簡単に区別すると、一方では官僚人として、他方では知識人・文学者であり、この立場が彼の作品に影響を与えるのである。

「舞姫」の考察

「舞姫」は、森鷗外自身の体験に多く対応しているが、どの程度まで事実がストーリーの中に取り入れられているかは、今後の実証的な伝記的調査の結果を待たなければならない。天方伯と山縣有朋の関わりも同じことで、ストーリーの中では豊太郎と天方伯の出会いは明治二十一年の冬のこととして描かれている。ちょうどその頃、明治二十一年九月から十月にかけて山縣も実際に海外に出張していたところである。しかし、読者がどの程度まで作品と事実との関わりを信じているか、それは自由である。「舞姫」を伝記的資料として扱いたい誘惑が強いだけでも、虚構として考えなければならないのは当然で

¹ 『冬柏』第八卷窮五号(昭和十二・十一)

ある。

「舞姫」は、近代的自我の確立の問題を扱っている点で、日本近代文学においては一つの重要な作品であると言われる。この作品が、近代的自我の目ざめをテーマとしていることは、例えば佐藤春夫氏の「森鷗外のロマンティズム」²によれば、

家庭と国家や社会に奉仕する事を一念とした封建的な明治日本の一青年が
欧州の文明を見ておもむろに近代精神に目ざめ、家庭とか社会とかいふ人
間の約束から次第に解放されて立身出世などの意義を疑ひ、漸く個人に意
義を得てニル・アドミラリな近代人となると同時に同類共通性質たる人間
性を知つて今までは取るにも足らぬものとしてゐた戀愛の真意義を苦悶す
るといふ話して、要するに建人が近代人となる精神変革史といふべきもの
云々

と要約されていることによつても分かる。これは「戀愛の真意義云々」の部分を除けば、おおむね妥当な見解であろう。しかし、「舞姫」がそういう「近代人」に変革されたはずの豊太郎の恋愛を捨てて官界に復帰し、立身出世の道を歩もうとする道程を描いていることは事実で、それゆえ、これまで矛盾とか、曖昧とかいう、様々な「舞姫」論が提出されてきたのである。

太田豊太郎が立身出世を選ぶか、エリスとの愛を選ぶかの二者択一を迫られ、エリスを選ぶと立身出世のチャンスを逸することになり、その反対に日本に帰って官途につくとするならば、エリスを捨てなければならないことになる。今までせつかく目覚めた「まことの我」や「独立の思想」を育て続けるか、それともそれを捨てて以前の我に戻るかという矛盾がこの作品の大切な主題となっている。結果としては結局、豊太郎はエリスとの愛を捨てて、立身出世のコースを選ぶのである。この作品には、そのように人が他者を愛している時に

²佐藤春夫著『近代日本文学の展望』八筑摩書房、昭和二五・七)所収「森鷗外のロマンティズム」参照。

はどうすべきなのか、また愛する者を捨てなければならないということが、
どんなに悲しく痛ましいことなのか、鮮やかに描かれている。

豊太郎が帰国することによって、形の上ではエリスを捨てたことになる
が、豊太郎自身の内面の問題としては、まだ解決がついていないのである。

自由なドイツの大学の雰囲気の中で勉強を始めた時、太田豊太郎は「ま
ことの我」に目覚める。

かくて三年ばかりは夢の如くにたちしが、時來れば包みても包みがたき
は人の好尚なるらむ、余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童な
りなど褒むるが嬉しさに怠らず學びし時より、官長の善き働き手を得た
りと獎ますが喜ばしさにたゆみなく動めし時まで、たゞ所動的、器械的
の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこ
の自由なる大學の風に當りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥
深く潛みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの
我ならぬ我を攻むるに似たり。³

そして、その後も具体的には政治学、法律学を勉強するのか、歴史、文
学を学ぶのかという立場にたって語られているのである。また、豊太郎は次の
ように言う。

余は私に思ふやう、我母は余を活きたる辭書となさんとし、我官長は余
を活きたる法律となさんとやしけん。辭書たらむは猶ほ堪ふべけれど、
法律たらんは忍ぶべからず。⁴

「活きたる法律」と「活きたる辭書」とは、豊太郎にとって相違するこ
ととして意識されている。彼にとって「活きたる何々」になることは、否定的
に捕えられているとは言え、直ちに拒絶されているわけではない。また、それ
ぞれを期待するのが官長であるのか、母であるのかによるのではない。豊太郎
にとって二人とも同じレベルに位置する。

³ 『鷗外全集』 諸二卷七ページ。

⁴ 注5に同じ。

子供の頃から、豊太郎は学問に精進し、常に首席を占めてきた秀才であった。「まことの我」に目覚めた時、彼はそのような過去の自身を、「人のたどらせたる道を、唯だ一條にたどりしのみ」の「所動的、器械的の人物」とみなす。しかし、豊太郎は自分の本意に反して、他者からの強制に従っていたというわけではない。

歴史、文学に心を寄せる己の好尚を自覚し、それを勉強することによって得られる充足感を通じて豊太郎は自他が未分化なまま相手と融合している状態から脱け出し、自我意識を形成させていった。しかし、自覚された自我を彼は、相手との未分化な人間関係の感覚に依存していたと主張するのである。もし豊太郎が官長や母の期待することに直接に背くと、彼等との関係が悪くなるのであろう。彼ははっきり背かなかったが、心の中ではそれを意識的に分別しているのである。豊太郎が自分の意志を持っていないということではないのである。この点について、三好行雄氏は次のように言う。⁵

他人の意志で動かされるのではなく、自由な生をのぞむ「私」のめざめを体験する。官長の支配を脱して、法律よりも歴史、文学に心を寄せる、「人なみならぬ面もちしたる男」に成長していったのである。(中略) 己の切実な体験を背後においてのみに自我覚醒の感動を生き生きと伝えてあざやかである。

覚醒した豊太郎は、こうした矛盾のうちにある。この時、豊太郎の「まことの我」の意識は、まだ学問上の好尚というレベルで、即自的に自覚されたものにすぎない。それは自己と他者が断たれてあることを前提とし、独立した個として自己を律しようとする、いわゆる近代的自我には遠いものと言わねばならない。だから、近代的自我の覚醒が豊太郎の免官をもたらしたのではない。むしろ一方で自覚意識を育てながら、他方自覚された自我を、自他が未分化な人間関係の感覚に依存して実現しようとする矛盾こそが、免官を準備すること

⁵ 三好行雄『日本文学の近代と反近代』（東京大学出版会、昭和四十七・九）参照。

になったのである。

小説前半部における太田豊太郎は、一つの矛盾した存在としてある。彼は、「まことの我」という形で自我を自覚し、意識の表面においては、近代に連なり、近代を指向するチャンスをもっている。しかし、同時にその意識下の心性には、自己と相手とが未分化につながり、融合するような人間関係の感覚を濃く保持し続けている。豊太郎のエリスに対する関係のしかたにも一つの矛盾を見出すことができる。

豊太郎が舞姫と交際していることは、同郷人からの内報によってついには官長の知るところとなってしまった。官長は、豊太郎の学問がわき道に逸れていることを公使館に伝え、彼は免官となった。公使はもし豊太郎がすぐ国に帰るならば旅費を支給するが、まだドイツにいるなら、官庁の助けを仰ぐことができないと言っている。しかし、彼はベルリンに留まることを選んだのである。その時彼は母の死を報ずる手紙を受け取った。免官のことと母の死のことに同時に出会った豊太郎にとって、エリスの愛は、他のなにものにも替え難い貴重な生き甲斐としてたちあらわれる。

このまゝにて郷にかへらば、學成らずして汚名を負ひたる身の浮ぶ瀬あらじ。さればとて留まらんには、學資を得べき手だてなし。⁶

もちろん、ベルリンにとどまったからといって、名誉挽回の機会があるという保証はない。しかし、どうしても汚名を着たままで帰国するよりチャンスを待ちながらベルリンに留まった方がいいと考えたのであろう。

相澤の助けで豊太郎は新聞社の通信員になり、政治や芸術のことなどの記事を書いて日本に送るのである。ベルリンに滞在するために生活の費用が必要である。新聞社からの給料は足りないために安い家に引っ越すことになる。いろいろなことを考えるうちに、「助の綱をわれに投げ掛けしはエリスなりき」

⁶ 『鷗外全集』第二卷十六ページ。

ということになる。豊太郎が彼女の家と一緒に住めるようにエリスは母を説得する。こうしたことがきっかけとなって彼等と一緒に住むことになる。

小説の展開の上では、「まことの我」の自覚に関わる豊太郎の振る舞いとエリスとの交際と、この二つが重なり合ったことで豊太郎は免官される。それは今まで見てきた矛盾、「まことの我」を自覚した豊太郎のうちにある矛盾と、エリスに対しての関係のしかたのうちに見出されることとが、同質のものとして作品中に書かれていることを意味する。

二人の関係の実質は、近代的な人格についての考え方に基づく恋愛を男女の交わりの基準とし、それに適合しないものをとるに足りないとして切って捨てるものである。しかし、そのようなエリスとの生活の中にあっても、一たび形成された豊太郎の自我意識が消滅してしまっただけではない。「まことの我」として自覚された自我意識は、依然として彼の内部に保持されたままである。このことは豊太郎の学問へのこだわりとして現われてくる。先に豊太郎の自我意識が、学問上の好尚という立場に於いて自覚されたことを見た。エリスとの生活の中にあっても、彼が自己の学問のあり方を取り立てて問題とする時、その背後には学問という形でも「まことの我」を実現しようとする志向が見てとれる。

作品中に登場する相澤謙吉に関わる記述はそれほど多くはないが、重要な意味を持っているといえよう。豊太郎の自我の変容、あるいはエリスとの恋愛を捨てて、帰国を決めるのには、相澤の役割が大きかったのである。友人として、相澤は豊太郎の弱性を批判して、次のように豊太郎を諫めて言う。

學識あり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかゝづらひて、目的なき生活をなすべき。今は天方伯唯だ獨逸語を利用せん心のみなり。(中略)人を薦むるは先づ其能を示すに若かず。これを示して伯の信用を求めよ。又彼少女との關係は、縦令彼に誠ありとも、縦令情交は深くなりぬとも、人材を知りてのこひにあらず、慣習といふ一種の惰性より生

きじたる交なり。意を決して断てと。⁷

相澤は豊太郎の「學識」と「才能」を惜しみ、エリスとの関係は深くなつたとしても、「人材を知りてのこひにあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交なり」と判断し、エリスとの関係を中断することを勧めるのである。

相澤の諫言、「學識あり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかゝづらひて、目的なき生活をなすべき」と言い、生活は目的を持たなければならないと言い、目的のある生活こそ確かな、意味のある生活であると考えた立場から豊太郎を批判する。特に「學識」と「才能」のある人は、それにふさわしい「目的」をはたさなければならない。その目的を果たすためにエリスと別れる可能性があることを意識するはずである。豊太郎にとって、相澤の「汝が名誉を恢復するも此時にあるべきぞ」という言葉は大きな誘惑となる。そして、天方伯の信用によって、立身出世の道が開き、苦しみを抱きながらエリスと別れる決心をするのである。そこにはもちろん、豊太郎の弱性の作用が認められる。彼は、自分自身で決断して行動することができない。

相澤の示す方針は、そうした批判の上に立って、目的を実現すべき道として提示されている。そのような批判を前にして豊太郎は、自らを「大洋に舵を失ひしふな人」と感じ、相澤が示した方針を「遥なる山を望む如き」ものと感ずる。こうした諫言を豊太郎は直ちに肯定したわけではない。彼は思い定めることができない。しかし、天方伯に随行してのロシア行きを通して豊太郎は、相澤が当然の前提としていた近代的な人間関係の原理を自らの内面に取り込んでゆくことになる。

相澤から聞いた豊太郎の約束に関してのエリスの反応であり、エリスに対する相澤の行為と役割と事後処理である。今まで彼女は豊太郎を信じ込んで

⁷ 『鷗外全集』第二卷二十二ページ。

いたが、彼女の純愛が見捨てられ、過激な心労が急に起こって、結果としてエリスは発狂状態になってしまい、「パラノイア」という精神病であり、医者によると治る見込みはないというのである。それは彼女の意志が潰されてしまったからである。

前に述べたように、相澤は豊太郎とエリスの破局についての処理を行なった重要な登場人物である。そして、そのことによって豊太郎の自我の変容、エリスとの愛を捨てて立身出世の道を選ぶのはエリスの悲劇の原因となるのである。

豊太郎にとって官長は自己と明確に切断された他者ではなかった。官長は、自分が自覚的に関係を結ぶ以前に、未分化なままに融合している相手であった。変化した自己をそのまま官長に認めさせようとしたのである。これに対して天方伯は明確な他者としてある。豊太郎は、大臣と自分との関係が職分を通じてのものであることを自覚している。しかし豊太郎は、天方伯の手にする糸に足を縛られているとみなす。未来の目的を実現するために、通訳という器械的な職分は必要である。今彼は語学の才能によって大臣の信用を得ることを手段として、チャンスを与えられようとしている。

サイゴンの港で自己が経てきた体験を回想している豊太郎は、その過去を自己の決断の所産であるとは見ていない。すべては彼の心の弱さゆえのこととして回想される。彼を帰国へと導いて行く心の弱さは、たとえば「友に勤しては否とはえ勤へぬが常なり」ということであり、また「余はおのれが信じて頼む心を生きたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答えの範囲を善くも量らず、直ちにうべなふことあり。」ということである。これは自己と親しい相手との間に心の差異が生じることを避け、むしろ相手に同化しようとする心性である。いわゆる近代的自我、自己を他者から切断された独立し

た個とみなし、自己の有能性を他と競おうとする自我意識から見れば、弱さと言えいえる。こうした豊太郎の心性は、自己と他者とが融合する、人間関係の感覚と通じていることを証し立てるものである。

豊太郎がエリスとの生活に充たされず、不安を抱いているのは明らかで、そこに相澤、天方伯から本来の帰属世界に戻る可能性が差し延べられた時、豊太郎がそれに縋って帰国しようとするのは、むしろ自然のなりゆきである。

「舞姫」という作品の全体を通して描かれているのは、その状況を生きる中で豊太郎自身に自覚されていった、自分というものの定めがたさであっただろうと思われる。

豊太郎は、自分の愛情を「慣習といふ一種の惰性より生じたる交」であるなどと考えていたわけではなかっただろう。しかし、大切なことは、自分の恋愛がここでは承認されることはなく、しかも豊太郎が本来の帰属世界に復帰するには、それが妨げになっているという相澤の判断の的確さが豊太郎にわかっていたということなのである。実際、豊太郎が相澤の忠告に何ら訂正を求めることなく、承諾の返事を与えてしまうのも豊太郎自身がどこかで相澤の言葉を肯定せざるをえない思いを抽さえきれなかったからである。

「舞姫」は主人公自身による回想の手記という形式をとっている。つまり、回想する「現在」での豊太郎の心性や意識が、回想される「過去」の記述の中に挿入され、説明の役割を果たすという重層的な語りの時間構造をとることによって作品は構成されている。

小説前半部における豊太郎は、一つの矛盾をかかえこんだ存在としてある。彼は「まことの我」という形で自我を自覚し、意識の表面においては、近代に連れなり、近代を指向するチャンスをも有している。しかし、同時にその意識下の心性には、自己と相手とが未分化につながり、融合するような人間関係

の感覚をも濃く保持し続けているのである。

この小説の各場面を分析して浮かび上がってくるのは、体験することによって次第に一つの方向に形成され、また変化して行く豊太郎の自我の流動性である。この変化はやがてエリスの悲劇となる。

作品に描かれているのは、豊太郎にとって自分というものが常に不変で、一定の判断を生み出す生産的、実体的なものではないということである。豊太郎の中に確固たる自我の存在、具体的には恋愛を守り通す意志の強さを見ることのできないこと、つまり豊太郎自身の中に不満が存在したといってもよいが、しかしそうした発想の根拠を疑ってから作品を見れば、「舞姫」には自己というものが堅固な実体としてではなく、自分自身および他者との関係においてあるものだという基本的な認識があり、豊太郎の姿はまさにそれを現わしたものと見ることができる。

太田豊太郎とエリスとの関係は精神的に近いが、彼にとってエリスは「外物」であるから、立身出世の道かエリスとの恋愛かのどちらかを選ぶ時、彼は立身出世の道を選んだのである。豊太郎と相澤との関係は、友人として相澤が豊太郎の不幸の閲歴を聞いた時、諫めて言い、精神的には近い人である。天方伯との関係は職分を通じてのものであることを豊太郎は自覚するのである。

「舞姫」の豊太郎の場合もエリスとの不充足な愛を捨てて、国家と自己との同一化につながり、立身出世の道を選ぶ。お玉が初めて自我に目覚めたのは、別れてから十日後に父親の所に訪ねたときである。「十日ばかり見ずにゐるうちに、丸で生まれ替つて来たやうである」と書かれている。そして、「これからは人に馬鹿にせられてばかりはゐない積なの」とお玉は父に語っている。そして、作者は次のように説明している。

これまで自分の胸の中に眠つてゐた或る物が醒覚したやうな、これまで人にたよつてゐた自分が、思ひ掛けず独立したやうな気になつて(以下省略)

それは「舞姫」の豊太郎が目覚めた「まことの我」、「独立の思想」と似ている。しかし、立身出世かエリスを選ぶかを決定するのは彼の自由である。「雁」のお玉の場合には、そのような自由がない。彼女は金に縛られ、「自分を今の境界から救ってくれる人を持つ以外にはない」のである。

豊太郎は、縛られた鳥のイメージとして描かれている。最初は官長の糸によって、後に天方伯の糸によって縛られる。彼は、常に他人によって変化していくのである。豊太郎は、「内の世界」と「外の世界」に生きている。「内の世界」はエリスとの世界であり、「外の世界」は現実社会である。自己再発見「まことの我」によって自律的に生きようとしたが、現実社会に戻ることによって、また再び「所動的」・「器械的」な、いわゆる受動的に生きることになるのである。彼は他人によって変化していく。自覚した「まことの我」を実現できなかつた時、彼は不安を抱いていた。

「舞姫」に描かれているのは、いわゆる西洋的自我の挫折であるけれども、自他の融和的關係性を指向する東洋的自我の発見と出発でもあるのである。

結び

以上のように、「舞姫」における、特に主人公の自我の問題を検討してみた。太田豊太郎は、縛られた鳥のイメージとして存在している。彼は常に他人によって変化していく。彼は、官長に「活きたる法律」として、母親に「活きたる辞書」として期待されるが、ドイツに来てから「まことの我」、すなわち自我に目覚めた。今までの自分の「所動的、器械的」な生き方に反して、他者からの強制に違っていたというわけではない。しかし、しばらくエリスとの生活の中に、「まことの我」を実現する道を見出し得なかつた時、彼は我が未来のおぼつかなさを感じる。免官になった豊太郎は、そのまま汚れている名前で帰国し

たくなく、この時友人の相澤謙吉の助けで東京の新聞社の通信員になり、いいチャンスを待ちながらドイツに残ることになったのである。

相澤にとって、「學識」と「才能」のある豊太郎は、ふさわしい目的を果たさなければならぬ。相澤によって豊太郎は天方伯の得、立身出世の道が開き、苦しみを抱きながらエリスと別れる決意をする。天方伯の通訳員、そして天方伯について帰る豊太郎は「所動的、器械的」に戻る。それで、一旦は自己再発見によって自律的に生きようとしたが、現実社会に戻ることによって、他律的・受動的に生きることになるのである。

森鷗外の生きた時代は長い鎖国から開国した日本が、新たに西洋の先進国に伍して、駆け足で近代化をはかった国家的緊急の時代であった。その時代は先進国に対抗する富国強兵策をとらざるをえなかった非常事態であった。明治の政府がやむなく取った富国強兵策の緒果は、日清、日露戦争と、さらに第一次世界大戦への参戦という、ほぼ十年を単位とした大戦争経の関わりとして現れた。

発展途上にあつた明治の日本は、富国強兵政策をかざし、西欧先進国に、追いつき追い越す努力が至上命令であつた。西洋文化が威圧的であろうと、高慢であろうと、それに嫌悪の情であろうと、模倣し摂取しなければならなかつた。鷗外のドイツ留学はこの時期であり、立身出世の手形とともに、近代国家建設期のエリートの宿命でもあつた。鷗外が天皇に拝謁し洋行したことは、国家にいかに囑望されたかということであつた。無論、鷗外がドイツに派遣されたのも、富国強兵政策の一環に組み込まれたのである。留学から帰国後は、富国強兵政策の担い手として、西洋で学び取得したものを日本に移植し、国家に貢献することが要求され義務となつた。鷗外にあつては、世界の医学を導き君臨していたドイツ医学を、いかに陸軍に活用するかということであつた。鷗外

個人には医学ばかりでなく、学問・文学・芸術などをどのように高めていくかの課題もあった。これらは数多の論争に見る戦闘的啓蒙運動であった。発展途上国であるために、その土壌の相違から拒絶反応に見舞われ、挫折感を味わったりもした。軍人、医学者であったばかりでなく、不断の努力によって、明治の代表的な知識人になっていく。後年の鷗外は「洋行帰りの保守主義者」と自称しているが、これには自嘲的な意味もふくまれ、「洋学の盛衰を論ず」で口演しているように洋学を重視している。しかも鷗外は洋学を無批判に模倣しなかった。西洋を知り日本の現状を知っていたからであろう。それだけに西洋に愛憎の情を持ちジレンマが付きまとった。鷗外には周本の近代化の必要性、とともに、日本の古いもの伝統的なもの尊重することの必要性もあった。鷗外はやはり「鼎軒先生」の二本足の学者であった。

鷗外の精神構造を論じて、よく「鼎軒先生」の一文が引かれる、田口卯吉は、明治の先覚者の一人である。於は今また明治啓蒙期の卓抜な先覚者福沢諭吉との比較において、田口鼎軒を論ずる、学問において鼎軒の福沢に一步先んじての懸隔のあることを強調する。そして鷗外は、このように述べる。「私は日本の近世の学者を一本足の学者と二本足の学者とに分ける。」「一本足の学者の意見は偏頗である、偏であるから、これを実際に施すとなると差支を生きずる、東洋学者に従えば、保守になり過ぎる、西洋学者に従えば、急激になる」と。鷗外は、このように述べたのち、「東西両洋の文化を一本づつの足で踏まへて立っている学者を要求する」と断ずる、鷗外の言わんとしたその人は、鼎軒先生である。

鷗外は、鼎軒に托して実は、おのれの本心を語った。鷗外の到りえた極北を語るに、回顧的思想小説「妄想」を晩することはできない。「鼎軒先生」は明治四十四年四月の発表である。鷗外は「妄想」を、この文と相前後して、

三、四月に発表した。「妄想」が「保守党の仲間」に逐いこまれ、「洋行帰りの保守主義者」の元祖になったと、自分で自分をあざける自信を確信するのは、まさに「鼎軒先生」の二本足の学者の軌跡をそのままおのれの身の上に是認するものである。

二本足学者をめざして、富国強兵を強調する普請中の時代の中の太田豊太郎は、エリスとの愛を捨てて立身出世を選んだのは不思議なことではない。

鷗外の近代化への傾情と思考は極めて柔軟であり、その思向した近代は、勿論西欧近代に根ざしたものであったが、なお鷗外の心奥には日本人鷗外の心象風景があった。『普請中』の「ここは日本だ」という座標は、近代化の過程においても、膚についたものであった。時代の好尚の隔たりは、樋口一葉、二葉亭四迷、幸田露伴、森鷗外、夏目漱石、島崎藤村、田山花袋、などの文章の読者に与える力の何分の一にかに減らすかも知れない。時代が激しい勢で変わって行くのを止める力は、結局は同じ筈で文学とはそれを言葉にする仕事である。単に東西文明の衝突融合の過程という見地から見ても、十九世紀の後半から現代までに日本の通って来た経験は類例のないものである。

鷗外は官僚として、軍人、軍医、医学者として、体制内知識人として国家の難局に直面したことになる。啓蒙的文筆活動をしたり、作品でのカタルシスを試みたりもした。鷗外の立場は、官僚と文学者、官僚と医学者、官僚と思想家・知識人、官僚と二本足の学者というように、微妙な相容れない二極構造、分裂とかかわっていた。官僚の発想は保身的に国家の発展、維持を優先するし、個人としては、国家より自由・幸福を重視するということになるろう。

総体的に見ると鷗外の考え方がコスモポリタンと言えるだろう。

参考文献

●単行本

- 金子幸代『鷗外と女性・一森鷗外論究一』（大東出版社、平成四・十一）
小金井喜美子著『森鷗外の系族』（大岡山書店、昭和一八・十二）
小堀桂一郎『若き日の森鷗外』（東京大学出版会、昭和五八・五）
佐藤春夫著『森鷗外のロマンティシズム・近代日本文学の展望』（筑摩書房、昭和二五・七）
清田文武著『鷗外と漱石との世界』（新潟大学放送公開講座、平成四・九）
清田文武著『鷗外文芸の研究青年期篇』（有精堂、平成三・十）
高橋義孝『現代作家論全集1 森鷗外』（五月書房、昭和三二・十一）
竹盛天雄 編『森鷗外必携』（學燈社、平成元年・十）
長谷川泉著『森鷗外論考』（明治書院、昭和四一・六）
Wibawarta, Bambang. 2003. Buah Tangan Dari Jerman. Jakarta: Kalang and The Toyota Foundation.
山崎國紀『鷗外森林太郎』（人文書院、平成四・十二）

●雑誌所載

- 浅井清、越智治雄「鷗外と明治」（国文学解釈と鑑賞・昭和三四・八）
荻原雄一「近代文学と近代的自我の確立」『研究紀要』（名古屋自由学院短期大学・二一
号、平成元・十）
小堀桂一郎「森鷗外舞姫」『読売新聞』（昭和四五・八・二一）
谷沢永一「鷗外・舞姫・の発想」『国文学』（関西大学・第百十七号、昭和三二・四）
長谷川和彦「鷗外・舞姫・の世界」『人文論究・三百一、昭和五五・六』
森鷗外「文使に就きて忍月居士に與ふる書」『国民新聞』（明治二四・二・二六）
森鷗外「再び忍月居士に與ふる書」『国民新聞・明治二四・二・一八』
和田和彦「舞姫一考」『富嶽論叢』（昭和六二・四）